

『数学セミナー』2020年2月号 「高校数学ではじめる整数論」

連載●第11回

相互律鑑賞会 付録

谷口 隆◎神戸大学大学院理学研究科



※ 式番号は本誌 2020 年 2 月号の連載と通して振っています.

◎一一一 (10) の証明

(12) にあるような和と積分の関係は、ポワソンの和公式というフーリエ解析の公式によって分析できます。(12) は正しい式ですが、(11) のように $G(n)$ の和を二つに分けず、 $G(n)$ 自体を考察し、(10) を直接証明することが可能です。その証明を通して、(11) のような和の分け方をしたことの意味も分かるので、ここでは (10) を証明します。 $e(x) := e^{2\pi ix}$ とおきます。

証明 各奇数 n について、次の条件をみたす \mathbb{R} 上の関数 $\varphi_n(x)$ を取る。

- φ_n は滑らかで、台は区間 $\left(-\frac{n}{4}, \frac{3n}{4}\right)$ に含まれる。
- $0 \leq \varphi_n(x) \leq 1$ であり、また $\left[-\frac{n}{4}\right] + 1 \leq x \leq \left[\frac{3n}{4}\right]$ で $\varphi_n(x) = 1$ である。
- n に依存しない正定数 M_1, M_2 で、 $|\varphi_n'(x)| < M_1, |\varphi_n''(x)| < M_2$ をみたすものが存在する。

以下、 $\varphi_n(x)$ の添字 n を省略して、 $\varphi(x)$ と書く。条件から

$$G(n) = \sum_{-\frac{n}{4} < a < \frac{3n}{4}} e\left(\frac{a^2}{n}\right) = \sum_{a \in \mathbb{Z}} \varphi(a) e\left(\frac{a^2}{n}\right)$$

である。ポワソンの和公式によって、

$$G(n) = \sum_{b \in \mathbb{Z}} F(b) \tag{21}$$

ただし

$$F(b) = F_n(b) := \int_{\mathbb{R}} \varphi(x) e\left(\frac{x^2}{n} - bx\right) dx = \int_{-\frac{n}{4}}^{\frac{3n}{4}} \varphi(x) e\left(\frac{x^2}{n} - bx\right) dx$$

である。以下、 $F(b)$ について次を示す。

$$F(b) = \begin{cases} \frac{1}{1-i} \sqrt{n} + O(1) & b = 0 \\ \frac{i^{-n}}{1-i} \sqrt{n} + O(1) & b = 1 \\ O\left(\frac{1}{b^2}\right) & b \neq 0, 1 \end{cases} \quad (22)$$

($b \neq 0, 1$ のときの $F(b) = O\left(\frac{1}{b^2}\right)$ は、 $|F(b)| \leq \frac{M'}{b^2}$ となる n, b に依存しない正定数 M' が存在するという意味である。) (22) が得られれば、(10) はすぐにしたがう。実際、(22) を (21) に代入すると、

$$G(n) = \frac{1+i^{-n}}{1-i} \sqrt{n} + O(1) + \sum_{b \neq 0, 1} O\left(\frac{1}{b^2}\right) = \frac{1+i^{-n}}{1-i} \sqrt{n} + O(1)$$

である。以下、(22) を考える。

$$\begin{aligned} F(0) &= \int_{-\frac{n}{4}}^{\frac{3n}{4}} \varphi(x) e\left(\frac{x^2}{n}\right) dx = \int_{-\frac{n}{4}}^{\frac{3n}{4}} e\left(\frac{x^2}{n}\right) dx + O(1) \\ &= \int_0^{\frac{3n}{4}} e\left(\frac{x^2}{n}\right) dx + \int_0^{\frac{n}{4}} e\left(\frac{x^2}{n}\right) dx + O(1) \end{aligned}$$

である。フレネルの積分公式 (14) より、この一項目の積分は

$$\begin{aligned} \int_0^{\frac{3n}{4}} e\left(\frac{x^2}{n}\right) dx &= \sqrt{n} \int_0^{\frac{3\sqrt{n}}{4}} e(x^2) dx \\ &= \sqrt{n} \left(\frac{1+i}{4} + O((\sqrt{n})^{-1}) \right) = \frac{1}{2(1-i)} \sqrt{n} + O(1) \end{aligned}$$

である。二項目も同様に計算でき、 $F(0) = \frac{1}{1-i} \sqrt{n} + O(1)$ である。 $F(1)$ は積分変数の x を $\frac{n}{2} - x$ で置換して、

$$F(1) = e\left(-\frac{n}{4}\right) \int_{-\frac{n}{4}}^{\frac{3n}{4}} e\left(\frac{x^2}{n}\right) dx + O(1)$$

である。積分は $F(0)$ のときと同じだから、 $e\left(-\frac{n}{4}\right) = i^{-n}$ により、 $F(1) = \frac{i^{-n}}{1-i} \sqrt{n} + O(1)$ である。

$b \neq 0, 1$ とする。 x を nx で置換して

$$F(b) = n \int_{-\frac{1}{4}}^{\frac{3}{4}} \varphi(nx) e(n(x^2 - bx)) dx$$

である. $b \neq 0, 1$ より, $x \in \left[-\frac{1}{4}, \frac{3}{4}\right]$ で $2x - b \neq 0$ であることに注意し, 部分積分を 2 回行うと,

$$\begin{aligned} F(b) &= -\frac{1}{2\pi i} \int_{-\frac{1}{4}}^{\frac{3}{4}} \left(\frac{\varphi(nx)}{2x-b} \right)' e(n(x^2 - bx)) dx \\ &= \frac{1}{(2\pi i)^2 n} \int_{-\frac{1}{4}}^{\frac{3}{4}} \left(\frac{\left(\frac{\varphi(nx)}{2x-b} \right)'}{2x-b} \right)' e(n(x^2 - bx)) dx \end{aligned}$$

である. ただしそれぞれで, 積分区間の端点で関数の値が消えていることを用いた. $x \in \left[-\frac{1}{4}, \frac{3}{4}\right]$ で

$$\left(\frac{\left(\frac{\varphi(nx)}{2x-b} \right)'}{2x-b} \right)' = \frac{n^2 \varphi''(nx)}{(2x-b)^2} - \frac{6n\varphi'(nx)}{(2x-b)^3} + \frac{12\varphi(nx)}{(2x-b)^4} = \frac{n^2 \varphi''(nx)}{(2x-b)^2} + O\left(\frac{n}{|b|^3}\right)$$

より,

$$F(b) = O\left(n \int_{-\frac{1}{4}}^{\frac{3}{4}} \frac{|\varphi''(nx)|}{(2x-b)^2} dx\right) + O\left(\frac{1}{|b|^3}\right)$$

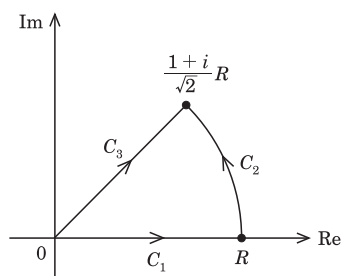
である. $|\varphi''(nx)| < M_2 = O(1)$ であり, また $|\varphi''(nx)|$ は $O\left(\frac{1}{n}\right)$ の長さの区間を除いて値が消えているので,

$$n \int_{-\frac{1}{4}}^{\frac{3}{4}} \frac{|\varphi''(nx)|}{(2x-b)^2} dx = O\left(n \cdot \frac{1}{n} \cdot \frac{1}{b^2}\right) = O\left(\frac{1}{b^2}\right)$$

である. 以上で $F(b) = O\left(\frac{1}{b^2}\right)$ が示された. ■

◎—2 (14) の証明

R を正の実数とし, C_1, C_2, C_3 を複素数平面上の次の積分路とする. C_1, C_3 は原点を端点とする線分で, C_2 は原点を中心とする半径 R の円弧である.



$e^{2\pi iz^2}$ は正則関数なので, コーシーの積分定理から,

$$\int_{C_1} e^{2\pi iz^2} dz + \int_{C_2} e^{2\pi iz^2} dz = \int_{C_3} e^{2\pi iz^2} dz \quad (23)$$

である. $\int_{C_1} e^{2\pi iz^2} dz = \int_0^R e^{2\pi it^2} dt$ である. C_3 上の積分は, $z = \frac{1+i}{2}t$ ($0 \leq t \leq \sqrt{2}R$) とおくと

$$\begin{aligned} \int_{C_3} e^{2\pi iz^2} dz &= \frac{1+i}{2} \int_0^{\sqrt{2}R} e^{-\pi t^2} dt \\ &= \frac{1+i}{2} \int_0^\infty e^{-\pi t^2} dt - \frac{1+i}{2} \int_{\sqrt{2}R}^\infty e^{-\pi t^2} dt \\ &= \frac{1+i}{4} + O\left(\int_R^\infty e^{-t} dt\right) = \frac{1+i}{4} + O(e^{-R}) \end{aligned}$$

と計算できる. C_2 上の積分は, $z = Re^{i\theta}$ ($0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{4}$) とおくと,

$$\int_{C_2} e^{2\pi iz^2} dz = Ri \int_0^{\frac{\pi}{4}} e^{2\pi iR^2 e^{2i\theta}} d\theta$$

ここで, $0 \leq x \leq \frac{\pi}{2}$ で $\sin x \geq \frac{2}{\pi}x$ であることから,

$$|e^{2\pi iR^2 e^{2i\theta}}| = |e^{2\pi iR^2(\cos 2\theta + i \sin 2\theta)}| = e^{-2\pi R^2 \sin 2\theta} \leq e^{-4R^2\theta}$$

である. したがって

$$\left| \int_{C_2} e^{2\pi iz^2} dz \right| \leq R \int_0^{\frac{\pi}{4}} e^{-4R^2\theta} d\theta = \frac{1}{4R} [-e^{-4R^2\theta}]_0^{\frac{\pi}{4}} \leq \frac{1}{4R}$$

である. (23) にこれらの結果を代入して,

$$\int_0^R e^{2\pi it^2} dt = \frac{1+i}{4} + O(e^{-R}) + O(R^{-1}) = \frac{1+i}{4} + O(R^{-1})$$

を得る. ■

◎—3 (16) の証明

これは比較的容易である. $\zeta = e^{\frac{2\pi i}{p}}$ とし,

$$A := \sum_{a \in \mathbb{F}_p^\times, \left(\frac{a}{p}\right)=1} \zeta^a, \quad B := \sum_{a \in \mathbb{F}_p^\times, \left(\frac{a}{p}\right)=-1} \zeta^a$$

と置く. 和はそれぞれ, $a \in \mathbb{F}_p^\times$ の元で $\left(\frac{a}{p}\right) = 1$ をみたすもの全体, $\left(\frac{a}{p}\right) = -1$ をみたすもの全体である.

$$A + B = \sum_{a \in \mathbb{F}_p^\times} \zeta^a = \sum_{a=1}^{p-1} \zeta^a = -1 + \sum_{a=0}^{p-1} \zeta^a = -1$$

である.

$$G(p) = \sum_{a \in \mathbb{F}_p} \zeta^{a^2} = 1 + \sum_{a \in \mathbb{F}_p^\times} \zeta^{a^2} = 1 + 2A = A - B,$$

$$((16) \text{ の左辺}) = \sum_{a \in \mathbb{F}_p} \zeta^{qa^2} = 1 + \sum_{a \in \mathbb{F}_p^\times} \zeta^{qa^2} = \begin{cases} 1 + 2A = A - B & \left(\frac{q}{p}\right) = 1 \text{ のとき,} \\ 1 + 2B = B - A & \left(\frac{q}{p}\right) = -1 \text{ のとき} \end{cases}$$

により (16) がしたがう。

◎一一四 証明 A の問題の解答

- (a) OT 上の点 $\left(x, \frac{qx}{p}\right)$ が格子点であるのは、 x が整数かつ qx が p の倍数であるときである。 p は素数であり、 q は p で割れないから、このとき x は p の倍数となる。しかし、 \mathcal{D} 内の点の x 座標は $0 < x < \frac{p+1}{2}$ だから、 p の倍数になることはない。
- (b) $1 \leq k \leq \frac{p-1}{2}$ とする。 kq を p で割ったあまりが $\frac{p}{2}$ より大きくなるのは、 $\frac{kq}{p}$ の分数部分が $\frac{1}{2}$ より大きいときである。つまり、 $E\left(k, \frac{kq}{p}\right)$ を通る縦線 $x = k$ 上で、 E の上側 $\frac{1}{2}$ 未満の距離に格子点が存在するときである。線分 RS は線分 OT を縦に $\frac{1}{2}$ だけ平行移動したものだから、このような格子点は、 \mathcal{D} 内の OT の上側に存在する格子点である。
- (c) これは (b) とまったく同様である。
- (d) 線分 OC, PS, QR の中点はいずれも M なので、六角形 OPQCSR は M に関して点対称である。よって \mathcal{D} も M に関して点対称である。M についてある格子点と点対称な点は格子点だから、 \mathcal{D} 内の格子点は、M に関して二つずつ互いに対称である。したがってその個数は、M が格子点であれば奇数で、そうでなければ偶数である。
- (e) 定理 3 より、 $\left(\frac{q}{p}\right) = (-1)^n$ 、 $\left(\frac{p}{q}\right) = (-1)^m$ である。また、(a), (b), (c) より \mathcal{D} 内にある格子点の個数は $m+n$ である。よって (d) から

$$\left(\frac{q}{p}\right) \left(\frac{p}{q}\right) = (-1)^{m+n} = \begin{cases} -1 & \text{M が格子点のとき} \\ 1 & \text{M が格子点でないとき} \end{cases}$$

である。 $M\left(\frac{p+1}{4}, \frac{q+1}{4}\right)$ が格子点であるのは、 $p \equiv q \equiv 3 \pmod{4}$ のときである。

◎一一五 証明 B の問題の解答

- (a) $y^n - 1$ は異なる n 個の複素数 $\zeta^0, \zeta^1, \dots, \zeta^{n-1}$ を根に持つので、因数定理を繰り返し用いて、 $y^n - 1 = \prod_{\ell=0}^{n-1} (y - \zeta^\ell)$ である。 y を $\frac{y}{z}$ で置き換え、両辺を z^n 倍すると、 $y^n - z^n = \prod_{\ell=0}^{n-1} (y - \zeta^\ell z)$ である。 n は奇数なので、 $\ell = 0, 1, \dots, n-1$ としたときの、 -2ℓ の法 n での剰余はすべて異なり、全部を尽くす。したがって

$$y^n - z^n = \prod_{\ell=0}^{n-1} (y - \zeta^{-2\ell} z) = \zeta^{-(0+1+\dots+(n-1))} \prod_{\ell=0}^{n-1} (\zeta^\ell y - \zeta^{-\ell} z)$$

である。 $0+1+\dots+(n-1) = \frac{n-1}{2} \cdot n$ は n の倍数なので、 $\zeta^{-(0+1+\dots+(n-1))} = 1$ である。

(b) (18) で $y = e^{2\pi ix}$, $z = e^{-2\pi ix}$ として,

$$f(nx) = \prod_{\ell=0}^{n-1} f\left(x + \frac{\ell}{n}\right) = f(x) \prod_{\ell=1}^{\frac{n-1}{2}} f\left(x + \frac{\ell}{n}\right) \prod_{\ell=\frac{n+1}{2}}^{n-1} f\left(x + \frac{\ell}{n}\right)$$

である. ℓ が 1 から $\frac{n-1}{2}$ までを動くとき, $n-\ell$ は $\frac{n+1}{2}$ から $n-1$ まで動くので,

$$\prod_{\ell=\frac{n+1}{2}}^{n-1} f\left(x + \frac{\ell}{n}\right) = \prod_{\ell=1}^{\frac{n-1}{2}} f\left(x + \frac{n-\ell}{n}\right) = \prod_{\ell=1}^{\frac{n-1}{2}} f\left(x - \frac{\ell}{n}\right)$$

だから, (19) が得られる. ただし $f(x) = f(x+1)$ を用いた.

(c) 定理 3 の証明のように, $ka \equiv r_k \pmod{p}$, $|r_k| < \frac{p}{2}$ とする. $\frac{ka}{p}$ と $\frac{r_k}{p}$ の差は整数なので, $f\left(\frac{ka}{p}\right) = f\left(\frac{r_k}{p}\right)$ である. よって $\prod_{k=1}^{\frac{p-1}{2}} f\left(\frac{ka}{p}\right) = \prod_{k=1}^{\frac{p-1}{2}} f\left(\frac{r_k}{p}\right)$ である. 一方, r_1, \dots, r_k は, 絶対値は全体として $1, 2, \dots, \frac{p-1}{2}$ である. よって, 負のものが n 個であるとすると, $f(-x) = -f(x)$ であることから,

$$\prod_{k=1}^{\frac{p-1}{2}} f\left(\frac{r_k}{p}\right) = (-1)^n \prod_{k=1}^{\frac{p-1}{2}} f\left(\frac{k}{p}\right)$$

である. したがって定理 3 より (20) がしたがう.

(d) (19) で $n = q$, $x = \frac{k}{p}$ とした式を, $k = 1$ から $k = \frac{p-1}{2}$ まで辺ごとにかけると

$$\prod_{k=1}^{\frac{p-1}{2}} \frac{f\left(\frac{kq}{p}\right)}{f\left(\frac{k}{p}\right)} = \prod_{k=1}^{\frac{p-1}{2}} \prod_{\ell=1}^{\frac{q-1}{2}} f\left(\frac{k}{p} + \frac{\ell}{q}\right) f\left(\frac{k}{p} - \frac{\ell}{q}\right)$$

である. (20) より, この左辺は $\left(\frac{q}{p}\right)$ である.

(e) (17) で p と q を置き換えると, $f(-x) = -f(x)$ であることから, 次のように示される.

$$\begin{aligned} \left(\frac{p}{q}\right) &= \prod_{k'=1}^{\frac{q-1}{2}} \prod_{\ell'=1}^{\frac{p-1}{2}} f\left(\frac{k'}{q} + \frac{\ell'}{p}\right) f\left(\frac{k'}{q} - \frac{\ell'}{p}\right) \\ &= \prod_{k'=1}^{\frac{q-1}{2}} \prod_{\ell'=1}^{\frac{p-1}{2}} f\left(\frac{\ell'}{p} + \frac{k'}{q}\right) \left(-f\left(\frac{\ell'}{p} - \frac{k'}{q}\right)\right) \\ &= (-1)^{\frac{p-1}{2} \cdot \frac{q-1}{2}} \prod_{k'=1}^{\frac{q-1}{2}} \prod_{\ell'=1}^{\frac{p-1}{2}} f\left(\frac{\ell'}{p} + \frac{k'}{q}\right) f\left(\frac{\ell'}{p} - \frac{k'}{q}\right) \\ &= (-1)^{\frac{p-1}{2} \cdot \frac{q-1}{2}} \left(\frac{q}{p}\right) \end{aligned}$$

◎一一六 補充律とその証明

ルジャンドル記号には、本体の相互律 (1) のほかに次の公式があります。

定理 4 p を奇素数とする。

$$\left(\frac{-1}{p}\right) = (-1)^{\frac{p-1}{2}}, \quad (24)$$

$$\left(\frac{2}{p}\right) = (-1)^{\frac{p^2-1}{8}} \quad (25)$$

が成り立つ。 □

(24), (25) の右辺がそれぞれ

$$(-1)^{\frac{p-1}{2}} = \begin{cases} 1 & p \equiv 1 \pmod{4} \\ -1 & p \equiv 3 \pmod{4} \end{cases}$$

$$(-1)^{\frac{p^2-1}{8}} = \begin{cases} 1 & p \equiv \pm 1 \pmod{8} \\ -1 & p \equiv \pm 3 \pmod{8} \end{cases}$$

となることは簡単に分かります。(24) と (25) はそれぞれ平方剰余の第一補充律、第二補充律と呼ばれ、(1), (24), (25) をまとめて平方剰余の相互律と呼ぶこともあります。

(24) は、オイラーの規準で $a = -1$ とした式です。また、11月号の命題3からもすぐにしたがいいます。(25) の証明は、本稿の 1, 2, 3 節のそれぞれの方法でできます。以下、それを紹介します。

6.1 代数的な証明

証明 $X^4 + 1 \in \mathbb{F}_p[X]$ の \mathbb{F}_p 上の最小分解体を $\mathbb{F}_p(\mu_8)$ とし、 $X^4 + 1$ の $\mathbb{F}_p(\mu_8)$ 内の根の一つを ζ とする。 $x := \zeta + \zeta^{-1} \in \mathbb{F}_p(\mu_8)$ とする。 x^2, x^p を計算すると、 $\zeta^4 = -1$ であることからそれぞれ、

$$x^2 = \zeta^2 + 2 + \zeta^{-2} = \zeta^2 + 2 - \zeta^2 = 2, \quad (26)$$

$$x^p = \zeta^p + \zeta^{-p} = \begin{cases} x & p \equiv \pm 1 \pmod{8}, \\ -x & p \equiv \pm 3 \pmod{8}, \end{cases} \quad (27)$$

である。(26) より $x \neq 0$ なので、(27) より

$$x \in \mathbb{F}_p \iff x^p = x \iff p \equiv \pm 1 \pmod{8}$$

である。一方 (26) より

$$x \in \mathbb{F}_p \iff \left(\frac{2}{p}\right) = 1$$

である。したがって $\left(\frac{2}{p}\right) = 1 \iff p \equiv \pm 1 \pmod{8}$ であり、(25) が示された。 ■

6.2 解析的な証明

定理 5 n を任意の正の整数とする. (7) の $G(n)$ について,

$$G(n) = \frac{1+i^{-n}}{1+i^{-1}}\sqrt{n} = \begin{cases} (1+i)\sqrt{n} & n \equiv 0 \pmod{4}, \\ \sqrt{n} & n \equiv 1 \pmod{4}, \\ 0 & n \equiv 2 \pmod{4}, \\ i\sqrt{n} & n \equiv 3 \pmod{4} \end{cases} \quad (28)$$

が成り立つ. □

証明 n が奇数のときは定理 2 で示したので, n が偶数のときを考える. (7) の和の a を $a + \frac{n}{2}$ に置き換えて,

$$G(n) = \sum_{a \in \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}} e^{\frac{2\pi i}{n}(a+\frac{n}{2})^2} = \sum_{a \in \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}} e^{\frac{2\pi i a^2}{n}} \cdot e^{\frac{\pi i}{2}n} = i^n G(n)$$

である. よって $n \equiv 2 \pmod{4}$ ならば, $G(n) = -G(n)$ だから $G(n) = 0$ である.

以下, $n \equiv 0 \pmod{4}$ として, (28) を示す. まずやはり, (9) が成り立つことを示す. $G(n^3)$ の $0 \leq a \leq n^3 - 1$ の和を $a = b + c \frac{n^2}{2}$, $0 \leq b \leq \frac{n^2}{2} - 1$, $0 \leq c \leq 2n - 1$ と置き換えて計算すると,

$$G(n^3) = \sum_{b=0}^{\frac{n^2}{2}-1} e^{\frac{2\pi i b^2}{n^3}} \left(\sum_{c=0}^{2n-1} e^{\frac{2\pi i b c}{n}} \right)$$

である. 内側の c についての和は, b が n の倍数のとき $2n$ で, そうでないときは 0 である. よって $b = dn$ と置き換えて,

$$G(n^3) = 2n \sum_{d=0}^{\frac{n}{2}-1} e^{\frac{2\pi i d^2}{n}} = n \sum_{d=0}^{n-1} e^{\frac{2\pi i d^2}{n}} = nG(n)$$

である. また, $n \equiv 0 \pmod{4}$ のときも (10) が成り立つ. この証明は n が奇数のときとまったく同様である. $\frac{n}{4}$ が整数になるので, 関数を少しだけ平行移動し, φ_n の台が $\left(-\frac{n+1}{4}, \frac{3n-1}{4}\right)$ 含まれるようにし, $-\frac{n}{4} \leq x \leq \frac{3n}{4} - 1$ では $\varphi_n(x) = 1$ となるように取ればよい.

(9) と (10) から (28) が得られることを示しておく. $E(n) := G(n) - \frac{1+i^{-n}}{1+i^{-1}}\sqrt{n}$ とおく. (10) から, すべての n について $|E(n)| \leq M$ となるような正定数 M が存在する. 正の整数 n を固定する. (9) から, 整数 $k \geq 0$ について

$$E(n^{3^k}) = n^{\frac{3^k-1}{2}} E(n)$$

が帰納的に得られる. よって $n^{\frac{3^k-1}{2}} |E(n)| \leq M$ である. $n > 1$ のとき, これがすべての k について成り立つためには, $E(n) = 0$ でなければならない.

$n = 1$ のときはこの論法は使えないが, $E(1) = G(1) - 1 = 0$ は定義からただちに示される. ■

(25) の証明 $\zeta = e^{\frac{2\pi i}{8}}$ とおく。まず

$$\left(\frac{2}{p}\right) = \frac{G(8p)}{4\zeta^p G(p)} \quad (29)$$

が成り立つことを示す。 $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z} \times \mathbb{Z}/8\mathbb{Z} \ni (b, c) \mapsto 8b + cp \in \mathbb{Z}/8p\mathbb{Z}$ が全単射であることから、

$$G(8p) = \sum_{b \in \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}} e^{\frac{2\pi i \cdot 8b^2}{p}} \cdot \sum_{c \in \mathbb{Z}/8\mathbb{Z}} e^{\frac{2\pi i pc^2}{8}}$$

である。右辺の積の第一項は (16) と同様に考えて、 $\sum_{b \in \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}} e^{\frac{2\pi i \cdot 2(2b)^2}{p}} = \left(\frac{2}{p}\right) G(p)$ である。一方、第二項は

$$\begin{aligned} \sum_{c \in \mathbb{Z}/8\mathbb{Z}} e^{\frac{2\pi i pc^2}{8}} &= \sum_{c=0}^7 \zeta^{pc^2} = 2 \sum_{c=0}^3 \zeta^{pc^2} = 2(1 + \zeta^p + \zeta^{4p} + \zeta^{9p}) \\ &= 2(1 + \zeta^p - 1 + \zeta^p) = 4\zeta^p \end{aligned}$$

である。これより (29) が得られる。(29) に (28) を代入すると

$$\left(\frac{2}{p}\right) = \frac{2\sqrt{8p}}{4\zeta^p(1+i^{-p})\sqrt{p}} = \frac{\sqrt{2}}{\zeta^p + \zeta^{-p}} = \begin{cases} 1 & p \equiv \pm 1 \pmod{8}, \\ -1 & p \equiv \pm 3 \pmod{8}, \end{cases}$$

となる。 ■

注 n を奇数とすると、(29) を示した方法と同じ議論で、

$$G(4n) = 2(1+i^n)G(n) \quad (30)$$

を示すことができます。したがって $G(4n) = 2(1+i)\sqrt{n}$ が示されれば、 $G(n) = \frac{G(4n)}{2(1+i^n)} = \frac{1+i^{-n}}{1+i^{-1}}\sqrt{n}$ が得られます。この意味で、(28) は実は n が 4 の倍数のときに示せば十分です。ただ、その証明は自然に n が奇数の場合を含めて考えることができるので、ここでは n が 4 の倍数のときと n が奇数のときとの両方を直接示しました。

6.3 初等的な証明

証明 定理 3 より、 $2, 4, \dots, p-1$ のうち $\frac{p}{2}$ より大きいものが n 個であるとする、 $\left(\frac{2}{p}\right) = (-1)^n$ である。 $p = 4k+1$ のとき、 $2, 4, \dots, p-1$ のうち $\frac{p}{2}$ より小さいものは k 個だから、 $n = \frac{p-1}{2} - k = k$ である。 $p = 4k+3$ のとき、 $2, 4, \dots, p-1$ のうち $\frac{p}{2}$ より小さいものは k 個だから、 $n = \frac{p-1}{2} - k = k+1$ である。したがって $(-1)^n$ はいずれの場合も k の偶奇によって決まり、結論をまとめると

$$\left(\frac{2}{p}\right) = \begin{cases} 1 & p \equiv \pm 1 \pmod{8}, \\ -1 & p \equiv \pm 3 \pmod{8}, \end{cases}$$

となる。 ■

[たにぐち たかし]
[絵／森脇かみん]